

トバ・バタック社会における “ラジャ・フタ”の性格とその変化

池 上 重 弘

The Characteristics and the Changes of the “Raja Huta”
among the Toba Batak in North Sumatra

IKEGAMI, Shigehiro

はじめに

本稿では、オランダ植民地支配によって生じた、トバ・バタック社会における政治的リーダーシップの変化を、特に“ラジャ・フタ (raja huta)”と称される伝統的首長の性格とその変化に焦点を当てて検討する。植民地支配以前の時代における政治構造の概要とラジャ・フタの性格について述べた上で、オランダ植民地支配が浸透した後、トバ・バタック社会の政治構造においてリーダーシップがいかに変容したのかという点について、文献資料および北スマトラ中央高原に位置する調査地区の事例に即して明らかにすることが本稿の課題である。

ラジャとは、元来王を指すインドの称号であり、ヒンドゥー的な王権概念が東南アジア地域に受容されるにつれ、王ないし王族を指す語として用いられるようになった[アンダヤ 1986a: 329- 30]¹⁾。インドネシア語辞典として最も権威ある辞典のひとつである『インドネシア語大辞典』では、「ラジャ」の第一の意味として、「通常は世襲によって引き継がれた、ある王国の最高権力者」[Departemen Pendidikan dan Kebudayaan 1989:721]と記されている²⁾。

しかしながら、植民地支配以前のトバ・バタック社会における政治構造の特質を検討したキャッスルズによると、トバ・バタック社会では王国は建設されなかったという[Castles 1975]。トバ・バタック社会では、文字や宗教的概念をはじめ、フタ (huta, 集落) やマルガ (marga, 父系氏族) など重要な政治的用語にもヒンドゥーの影響が認められるが、国家と定義しうるようなものは出現せず、オランダによる植民地支配以前には組織的な政治体制は導入されなかったというのである[*ibid.*:67]。オランダ植民地支配に対する北スマトラ中央高原地帯での抵抗運動の指導者として知られるシ・シンガ・マンガラジャ12世 (Si Singamangaraja XII, 1849 - 1907) が、あたかも王国を築いていたかのように理解する見解を、キャッスルズは根拠不足として退け、シ・シンガ・マンガラジャ12世は世俗的権力を行使する政治的リーダーとして機能していたのではなく、反オランダ闘争を除けば、むしろ宗教的な崇敬の対象であったと論じている[*ibid.*:73- 5]。このようなキャッスルズの指摘に従えば、先に述べたような意味での、強大な政治的権力を保持した王としてのラジャは、トバ・バタック社会には存在しなかったと判断するのが妥当であろう。

ところが、ひとたびトバ・バタックの村に足を踏み入れると、ラジャという語句が頻繁に用

いられることに気がつく。墓に関する調査時には、「あの石棺はラジャの遺骨を納めた改葬墓だ」とか、「石棺の建立には多大な財力が必要とされるので、それが可能だったのはラジャだけであった」というように、特定の社会的・経済的地位にある者を指示する文脈で、ラジャという語句が用いられる場面が多かった。一方、実際の墓、特にオランダ支配が確立した20世紀初頭に降に建立されたモルタル塗りの大型の墓について、墓碑の記載事項を確認していると、被埋葬者の名前として「ラジャだれそれ」といった記載を目にすることが少なくない。しかし、たいていの場合、そこに埋葬されているのは、ごく普通の農民として一生を送った人々にすぎない³⁾。こうした一見矛盾した用法は、墓に関する事項だけではない。たとえば、他の村人は所蔵していないような大型の皿を食器棚から持ち出して、「私たちはラジャの子孫だから、このような立派な陶器の皿を持っているのだ」と自慢げに語る人がある一方で、「トバ・バタックの男性は皆ラジャだから、彼らの自尊心を傷つけてはいけない」と忠告する人がいるのである。

上記の諸例からも明らかなように、トバ・バタック社会におけるラジャという語句の意味と用法は多様であり、一義的な理解をあてはめるだけでは混乱を招きかねない。この点について、トバ・バタック人であるシトゥモランも同様の指摘をし、トバ・バタックの文化的脈略を考慮しないとしばしばラジャという語句について誤った理解がなされると注意を促している [Situmorang 1993:173]。そこでまず、トバ・バタック社会でラジャという語句が用いられる文脈を整理して、大きく三つに分けて考える必要があるだろう。それはすなわち、第一に、政治的リーダーの地位に関連した用法であり、第二に、後述するホルジャ (horja, ムラ) の成員権 (奴隷でない、いわば自由人としての地位) を指す場合の用法である。そして第三に、一般の男性に対する尊称・敬称としての用法である。本稿での議論は、主としてここに挙げた第一の用法に関して展開されるが、本論に入る前に、他の二つの用法について簡単な説明が必要であろう。

第二の用法に関して、シトゥモランは、「トバ・バタック社会においては、奴隷でない限り、成人している全ての世帯主は、出自や社会的地位に係わりなく、ラジャと称される」[loc.cit.] と記している。彼はこの意味でのラジャの性別について特に言及していないが、奴隷層を除いて全てのトバ・バタック男性はラジャであるという『トバ・バタック文化事典』の記載 [Marbun and Hutapea 1987:145] から、それは男性であることが明らかである。この意味でのラジャは、「自由な成員であり、法的な権利と義務が同等」[Situmorang 1993:173] とされ、「議論の場において意見を述べる権利を有する」[Siahaan 1984:2] のである。ハトバン (hatoban) と呼ばれた奴隷は、集落間のいくさによる捕虜や負債による債務奴隷であり、現在は廃止されている [Marbun and Hutapea 1987:57-8]。先に挙げた例のうち、一般的な農民の墓碑に記された名前の前に「ラジャ」という文字が付加されていたり、「トバ・バタックの男性は皆ラジャだから自尊心を傷つけるな」という忠告が発せられるのは、この意味でのラジャの用法と考えられる。

第三の用法は、第二の用法について検討した内容を前提としている。すなわち、毎日のつきあいにおける礼儀作法として、相手に対してラジャと呼びかけるのである [Situmorang 1993:44]。『バタック語 - インドネシア語辞典』の「ラジャ」の項にも尊称・敬称としての用法が挙げられ、「Horas ma raja nami.」という文例が記載されている [Sarumpaet 1994:226]。これは客を迎える際に発せられる挨拶の言葉であり、「我らがラジャ、ようこそ」といった文脈で用いられる。また、儀礼の際に、挨拶を述べた相手に対して、「我らがラジャ、ありがとう」(“Mauliate raja nami. ”) という返礼がなされることが多い⁴⁾。

さて、上述のように、本稿で検討するのは、植民地支配以前のトバ・バタック社会における政治的リーダーの性格はいかなるものであったか、それは歴史的にどのように変化してきたかという問題である。政治的リーダーとしてのラジャは、英語ではしばしば village chief、すなわち「村落首長」と表現される。しかしながら、どのようなレベルの社会的・政治的単位を village と規定するかという点で、研究者の間に見解の相違が認められる。1920年代後半に行政官として北スマトラに滞在し、トバ・バタックの社会組織とアダット (adat, 慣習法) について体系的な記述を残したフェルハウウェンは、トバ・バタック社会において最も小さい社会的・政治的単位であるフタを village と規定している [Vergouwen 1964:105- 17]。それに対して、1950年代に調査を行ったブルーナーは、フタを hamlet と記し、複数のフタからなるホルジャを表現するのに village という訳語を当てている [Bruner 1959:54]。シトゥモランは、これらの両者と異なり、インドネシア語で「村落」を意味するデサ (desa) が village に相当するとした上で、そのデサという語句を複数のホルジャで構成されるビウス (bius) に相当するものとして用いると述べている [Situmorang 1993:44]。研究者によって village という語句で指示される単位がこのように異なるため、village chief という表現を用いてなされる議論には齟齬や混乱が認められるのである。

トバ・バタック社会の政治構造には地域差も大きい。政治的リーダーとしてのラジャ・フタの性格とその変化を明らかにするには、具体的な地区の事例に基づいた検討が有益であろう。北スマトラ州中央部の高原地帯に広がるトバ・バタックの故地は、主として 1) 標高約900mに位置するトバ湖に浮かぶサモシル島、2) トバ湖南東岸の肥沃な平坦地域、3) 南西部の冷涼な高原地域、そして 4) 南部の峡谷地域の四地域にまたがるが、本稿では、トバ・ホルブン (Toba Holbung) と呼ばれる南東岸平坦地域での調査結果に基づいて議論を進める⁵⁾。

植民地支配以前の政治構造とリーダーシップ

オランダによる植民地支配以前のトバ・バタック社会においては、フタ (huta) - ホルジャ (horja) - ビウス (bius) という三つのレベルからなる階層的な政治構造が認められた [Pedersen 1970:42]。ここでは、トバ・ホルブンの西端に位置するタッパハン (Tampahan) 地区を例に取りながら、これらの階層的な政治構造における政治的な意志決定のしくみについて検討したい。

図1に示すように、あるビウスは、複数のホルジャからなり、ひとつのホルジャは数多くのフタから構成される。すなわちフタが最小の政治単位である。タッパハン地区は、かつてビウス・タッパハンと称されていた地理的範囲に相当する。そこには、北から順に列挙すると、1) タラブン

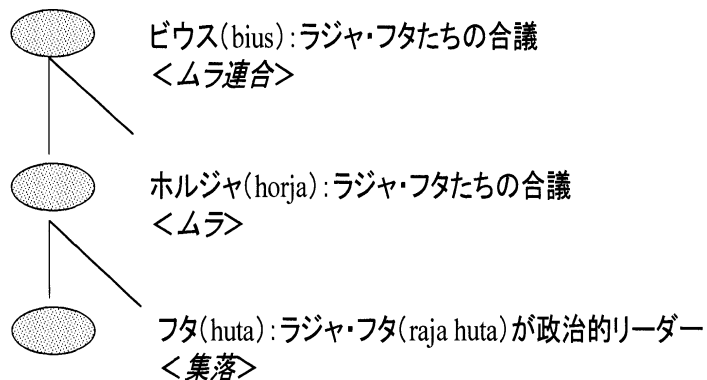


図1 植民地支配以前のトバ・バタック社会における政治構造とリーダーシップ

ガ (Tarabunga) 2) リントン・ニ・フタ (Lintong ni Huta) 3) メアット (Meat) 4) グルグル (Gur-gur) 5) アエック・ラジャ (Aek Raja) 6) タンガ・バトゥ (Tangga Batu) の六つのホルジャが含まれる。ピウス単位での儀礼に対するオランダ政庁の禁制が奏功した結果 [Vergouwen 1964:73] オランダ時代から現在に至るまでピウスという単位は機能していないが、ホルジャは後述するようにさまざまな機能を保持している。各ホルジャには三十前後のフタがある。

(A) 地理的単位としてのフタ - ホルジャ - ピウス

フタ - ホルジャ - ピウスが地理的単位としてはいかなるものか、写真1から写真4を参照しながら簡単な説明を加えたい。

写真1は、フタの外観を示したものである。うっそうと茂った竹に覆われ、水田の海に浮かぶ緑の島のように見えるのがフタである。写真2は、フタの入り口から内部の様子を窺ったものである。かつて、フタとフタの間で戦争が行われていた時代、防衛上の目的からフタの周囲には土塁が築かれ、その上に竹が植えられた。現在でもこうした土塁が残されているフタが少なくない。フタの敷地は通常長方形で、ソポ (sopo) と呼ばれる穀倉とルマ (ruma) と称される家屋が、中央の広場を挟んで対面し、平行に並んでいる。現在では板壁のついた穀倉も住居として利用されている。家の裏や土塁のわきに小規模な畑が開かれている場合もある。

写真3は、二つのホルジャにまたがる部分を撮影したものである。手前のホルジャ (リントン・ニ・フタ) の水田では稲が実っているが、奥のホルジャ (タラブंगा) の水田はこの時点



写真1



写真2



写真3



写真4

では作付けされていないため、水田部分の色の濃淡からホルジャの境界が看取できる。特に植え付けされていない奥のホルジャの緩斜面に注目すると、水田の中にフタが点在する様子がわかる。

写真4の中央付近には、左右に伸びる標高差100mほどの段丘面と正面の山との間に台地が広がっている。この台地が、かつてのピウス・タッパハンにほぼ相当する範囲である。

これらの写真から明らかなように、フタは「村落」として理解するには小規模すぎるように思われる。地理的単位としてのフタ - ホルジャ - ピウスに、日本語の語感からして違和感のない訳語を当てはめるとすれば、それぞれ集落 - ムラ - ムラ連合という訳語が適切であろう。ただし、本稿では、訳語で言い換えず、引き続きトバ・バタック語の名称を用いることにする。

(B) 社会的・政治的単位としてのフタ - ホルジャ - ピウス

(1) フタの形成と機能

生活空間としてのフタがいかなるものであったか、手始めにフェルハウウエンの記述を引用してみよう。

フタの家屋数が二十を超えることは珍しく、通常は六、八、十、十二の家屋に二、三家族が居住するため、フタの内部的な出来事に係わる人はわずかだが、出来事の内容は多岐にわたる。土塁の手入れが必要だし、その上に植えられた竹や、土塁周囲の溝や、今日⁶⁾ではわずかししか残されていないソポと呼ばれる集会場も、補修が必要である。排水溝にも注意を払わねばならないし、フタの出入り口も同様である。フタの住人自身の間で、子供や犬、飼っているブタをめぐるささいな口論が起ころう。住人のある者は米を貯える穀倉を建てたいと思うだろうし、別の者は材木として使うために土塁の上の木を切りたいと考えるだろう。また、さらに別の者は空いている土地を小さな菜園に利用したいと思うだろう。(中略)ある家が取り壊され、他の者に売られるだろう。もしくはある住人が遠くに移るか、近くの別の場所に住むのにフタを去ることになれば、彼の財産や土地に関する問題が解決されなければならない。夫に家から追い出された妻は、フタの首長のもとに駆け込むだろう。たくさんの病人が出ると、ダトゥ(datu, 呪術者)に相談が持ちかけられるだろう。ある住人が死んで…。こうした全てのことがフタで起ころうとする出来事であり、外の世界から遮断された小集団における協同生活の諸局面を構成している。[Vergouwen 1964:109- 10]

フェルハウウエンがトバ・ホルブンに滞在した1920年代後半は、すでにオランダによる植民地支配がトバ・バタック社会の末端まで浸透していた時代であった。したがって彼自身は植民地支配が及ぶ以前のフタの様子を直接観察したわけではない。その点から厳密な判断を下せば、あたかも眼前に展開するかのように記述されているこの一節を、植民地支配以前のフタの様子として理解するのは誤っているかもしれない。しかしながら、レイデン大学で訓練を受けたアダット専門の行政官であるフェルハウウエンが、自分自身による観察と並んで古老への丹念な聞き取りを欠かさなかったであろうと推測することは困難ではない。その点を念頭に入れて考えれば、ここで理想型として描かれている一節は、植民地支配以前のフタにおける生活の局面をほぼ的確に再構成したものと了解して差し支えないであろう。すなわち、トバ・バタック人

にとって、かつてのフタは生産活動をはじめとした日常生活の舞台であり、日常のささいな諍いの取り成しから財産や土地に係わる法的な取り決めまでが、フタを舞台に繰り広げられていたことが理解できるのである。

それでは、こうしたフタで生活するのは、どのような人々なのか。この点について考える前に、トバ・バタック社会の親族制度について説明を加える必要がある。

トバ・バタック社会は、父系制の親族制度を特徴とする。父系氏族の成員は、シマンジュンタック (Simanjuntak)、フタガオル (Hutagaol) などのような姓を共有している。父系氏族はマルガ (marga) と称され、外婚単位となっている。妻与集団であるフラフラ (hula-hula) 自らの父系氏族であるドンガン・トゥブ (dongan tubu)、妻受集団であるボル (boru) の三者は、「かまどの三つの石」を意味するダリハン・ナ・トル (dalihan na tolu) と言われる。この三者間の関係は、結婚式や葬式などのアダット儀礼においてのみならず、トバ・バタックの社会関係の基軸をなす。フラフラはボルに対して霊的優位性を有すると考えられ、社会関係においても優位におかれる。

父系制のトバ・バタック社会においては、夫方居住が原則である。そのため、フタには創設者の父系子孫とその家族が主として居住するが、他にも創設者の直接の父系子孫ではないが創設者と同じマルガの者が移り住んできたり、妻方居住の男性が妻子と住むこともめずらしくない(妻の親との同居もしばしば見られる)。フェルハウウエンは、かつて進取の気性に満ちた男性が新しくフタを拓く際、繁栄しているボルを開墾の助力者として伴ったり、開墾後にボルの男性が住みつくようになることがあったと記述している [*ibid.*:50-1]。

フタの住人の中における権威者は、一般にラジャ・フタ (raja huta) と称されるフタの首長であった。フェルハウウエンによれば、フタにおいて協同的な生活を営む人々みなが平等ではなく、フタの創設に由来した差異がある [*ibid.*:110-1]。では、誰がラジャ・フタになるのか。フタ創設者が最初のラジャ・フタとなる点は容易に理解できる。シアハアンも、そもそもフタの創設者は、最も良い土地を入手し、財産を管理する特権を持つので、フタの中で特権的な地位を占めると記述している [Siahaan 1984:2]。問題はその特権的な地位の継承原理である。フェルハウウエンはラジャ・フタの地位を継承する者について、「最初のラジャ・フタであるフタ創設者の父系子孫」と記している [Vergouwen 1964:115]。しかしこれは、ラジャ・フタの地位継承が、必ずしも父から息子への世襲原理だけによってなされることを意味するのではない。「もし可能であれば、この地位は父から息子へ継承される」 [*loc.cit.*] というフェルハウウエンの記述は、逆に言えば、父がラジャ・フタであっても、その息子たちのうちの一人が自動的にその地位を継承するとは限らないことを示しているのである。

ラジャ・フタとしての地位を継承するためには、フタ創設者の父系子孫の男性であることはいわば必要条件であり、優れた個人的資質を有することが十分条件とされる [Keuning 1958:8; Vergouwen 1964:131]。ラジャ・フタが有するべき資質は、サハラ・ハラジャオン (sahala harajaon) と言われ、具体的には、勇気、知性、弁舌の才、ホスピタビリティ、富が挙げられる [Keuning 1958:8]。ここでいうサハラとは、トンディ (tondi) と呼ばれる人間の魂の潜在的な力が知覚化されたものである [Vergouwen 1964:82]。ヴァイナーは、それを別な表現で「トンディの力が明確な形をとったもの」 [Viner 1979:103] と言い表している。すなわち、生きている人間はだれもがトンディを持つが、その潜在力を存分に発揮できるのは限られた人であり、サハラが強まれば、その結果として富や名声、子孫の繁栄が付随するが、逆にサハラが消失す

れば、富や名声は失われると考えられているのである。出生率の低下や死亡率の増大によるリネージメンバーの減少、ラジャ・フタの病気、賭け事での大敗、凶作、いくさでの敗北は、サハラ・ハラジャオンの消失のしるしと理解され、ラジャ・フタとしての権威の失墜を招来したのである[Vergouwen 1964:131]。

フェルハウウェンの記述によれば、フタ創設者の父系子孫のうち、個人的資質に優れた一人のラジャ・フタがフタを管理し、法と慣習、秩序と規律を維持する責任を負う。ラジャ・フタの職務はフタの生活の諸局面と同様に多様であり、フタ中央の広場と土塁の保全に責任を持ち、家々の配置の割り当てや菜園利用の許可などフタの土地利用も管理下におく。住人間の争いや負債をめぐる争いの際は仲裁を務める。住人の子供の結婚に際しては、婚約の協議を進める。外の世界と交渉する必要が生じた場合には、フタの利益の代弁者となるのである[*ibid.*:115- 6]。

フタの住人はラジャ・フタのリーダーシップを受入れ、彼の指導に従わねばならない。このことの証拠として、住人たちは結婚や牛の売買、土地の譲渡などを行う際に、ウパ・ラジャ(*upa raja*)と称される献上物を差し出して、ラジャ・フタに敬意を表さねばならない[*ibid.*:116]。フタの住人から献上物を受け取ることが、ラジャ・フタの権威の証だったのである。

(2)ホルジャの形成と機能

子供の成人・結婚に伴うフタの分離独立、他の地区からの新しい開墾入植などによってフタが増加すると、親族関係や水利上の必要などによって、いくつかのフタがより緊密な関係を持つようになる。通常これらのフタは地理的にも比較的近接した位置に分布している。これがホルジャである。ホルジャを単位とした意志決定の場では、それぞれのフタを代表して合議に参加したラジャ・フタによって、フタ間の利害関係や共同作業に係わる事項が協議される[Marubun and Hutapea 1987:60]。マルブンとフタペアは、ラジャ・フタの中から選出されたラジャ・ホルジャ(*raja horja*)がホルジャの長になると記述しているが[*loc.cit.*]、リントン・ニ・フタでインタビューした年長者たちは、ホルジャの単位では特定の指導者は存在せず、意思決定は合議によってなされていたと述べた。ただし、ラジャ・フタの中でも傑出した個人的資質を認められた者の発言は重視されたという。

(3)ピウスの形成と機能

複数のホルジャからなるピウスは、日常的な文脈においては、定期市の単位となっていた[*ibid.*:31]。ラジャ・オロアン(*raja oloan*)と称されるピウスの統率者が、各ホルジャの代表者たちの中から互選されたが、それは恒久的な地位ではなく、合議の際の議長としての機能を果たすだけだった[*loc.cit.*]。また、ピウスは農耕儀礼や盛大な祖先祭祀の単位でもあった。これらの儀礼を司る宗教的職能者はパルバリンギン(*parbaringin*)と呼ばれたが、その地位は世襲ではなく、一部の地域を除いて、政治的な権力は保持していなかった[Vergouwen 1964:71- 9]。

紙幅の都合上、トバ・ホルブンのホルジャとピウスの性格については簡単な言及にとどめざるを得ないが、少なくとも、フタより上位の単位であるホルジャとピウスは、政治的側面に関して言えばフタの自律性を前提とした協議機関としての性格を持ち、支配者と表現しうるような政治的リーダーが独断で政治的決断を下す場ではなかったと考えてよいだろう。

以上から明らかなように、オランダ支配以前のトバ・パタック社会において、政治的に重要な“首長”とは自律性の高かったフタの権威者、すなわちラジャ・フタであったと理解できる。

フェルハウウェンの言葉を借りれば、ラジャ・フタは「政府と警察が一体となったもの」[*ibid.*: 116]だったのである。

オランダ植民地政府の統治機構

トバ・バタック社会では、キリスト教のミッションが先導する形でオランダによる植民地支配が進展した。1860年代から本格的に開始されたドイツのライン伝道協会による布教活動によって、それまでのアニミズム的な土着宗教からプロテスタント（ルター派）への改宗者が相次いだ[Pedersen 1970:47- 72]。トバ・ホルブンについてみると、1881年にドイツ人宣教師がバリゲに着任して以来、布教の拠点としての教会が徐々に開かれ、1911年には103,528人の信徒を擁するに至っている[Hutauruk 1994:113- 21]。リントン・ニ・フタでは1888年に初めての改宗者が現われた[Gereja HKBP Tampahan 1938:8]。オランダ政府は、1883年にオランダ人監督官をトバ・ホルブンの中心都市であるバリゲに駐在させ、1886年以降、トバ・ホルブンで郡長（ラジャ・イフタン, raja ihutan）、副郡長（ラジャ・パドゥア, raja padua）、村長（クバラ・カンブン, kepala kampung）という植民地首長を任命していった[弘末 1990:48- 9]。本節で検討するのは、トバ・ホルブンにヨーロッパ人が駐在するようになった1880年代から日本軍政が始まる1942年までの、オランダ植民地統治下の政治構造である。⁷⁾

図2は、タッパハン地区におけるオランダ政府の統治機構を、年代の相違をひとまず考慮の外において模式的に示したものである。ここでまず確認しておきたいことは、1)末端の単位であるカンブン（kampung）は、通常はいくつかのフタを包含する単位であったこと、2)かつてのピウス・タッパハンにほぼ相当する範囲が20世紀に入ってからヌグリを構成したこと、3)植民地支配の当初設定されたフッドウランは必ずしも厳密にホルジャに対応する単位ではなかったが、地理的な規模でいうとカンブンとヌグリの中間的な単位であったことの三点である。以下でそれぞれの単位について説明を加えてゆく。

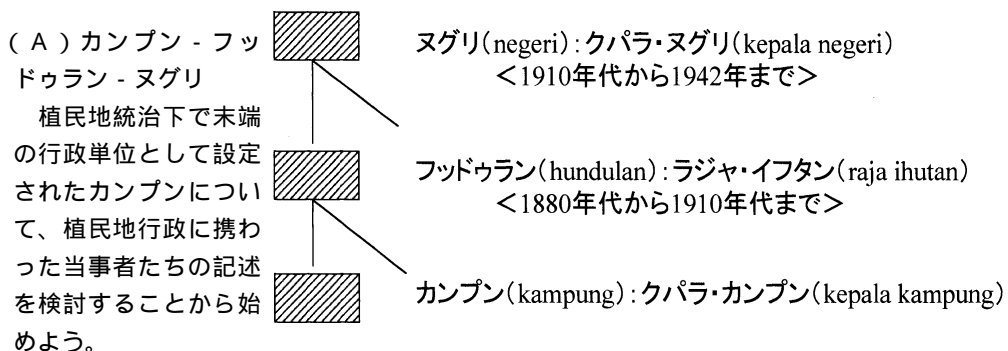


図2 オランダ植民地政府によるトバ・バタック社会の統治機構と植民地首長

オランダ統治下の地方政治機構において、

従来の政治構造と最も大きく異なる点は、フタが植民地行政の最小単位とならなかったことである。オランダ人の政府役人は、末端政治単位としてのフタの重要性を認識していたが、フタは小規模で数が多すぎるため、植民地支配下での最下位の政治単位とされなかった[Keuning 1958:16]。そのかわりに最下位の政治単位として設置されたのは、トバ・バタックの土着的な政治構造にはなかったカンブンという単位であった。フェルハウウェンによると、

「村長」を意味するクバラ・カンブン (kepala kampung) というマレー語の称号を与えられた首長が、早い所では1883年に任命された[Vergouwen 1964:127]。クバラ・カンブンは、ひとつの大きなフタ、もしくはより小さないくつかのフタの首長となった[loc.cit.]。いくつかのフタがひとつのカンブンにまとめられるに際して、フタ間の親族関係や母村 - 派生村関係、姻戚関係といったトバ・バタックの社会・政治構造において重要な要因に注意が払われることは少なく、政庁側にとって調査しやすい地理的近接性や住人数が、統合のための主たる基準になった[loc.cit.]。クバラ・カンブンは、オランダ政府の規定の執行、労役管理、のちには徴税も担当し、次第にクバラ・カンブン以外の他のラジャ・フタの特権を侵蝕していった[Keuning 1958:16-7]。アダットに則ったラジャ・フタの収入と特権はクバラ・カンブンに侵害されていったのである[Castles 1972:210]。

19世紀後半の政庁支配の初期には、フッドウラン (hundulan) という政治単位が設定され、オランダ政府によって、有力なラジャ・フタの中から、フッドウランを統治するラジャ・イフタン (raja ihutan) が選定された。ただし、カンブンとフッドウランの関係にはさまざまな変異があったと考えられる。ケーニングによると、いくつかのカンブンがフッドウランにまとめられ、「追従されるべき首長」を意味するラジャ・イフタンが置かれたが、そうではなく、ある地域を直接フッドウランと設定し、ただ一人がリーダーとして承認される方が都合のよいこともあったという[Keuning 1958:17]。ここから解釈できるのは、複数のカンブンからひとつのフッドウランが構成され、クバラ・カンブンの上位にラジャ・イフタンが存在する場合と、カンブンが設置されず、いわば最下位の植民地首長としてラジャ・イフタンが存在する場合があったということである。村人たちが語るところによれば、政庁支配初期のリントン・ニ・フタは後者のパターンであった。すなわち、クバラ・カンブンはおかれず、まずラジャ・イフタンが任命されたというのである。

トバ・ホルブンにおける従来の政治単位とフッドウランの関係についても、フェルハウエンとキャスルズの見解は以下のように相違している。すなわち、フェルハウエンは、「多くの場合、当初ホルジャはいくつかのフッドウランに分けられた」[Vergouwen 1964:128]と記すが、それに対して、キャスルズは、「ホルジャは(中略)通常ひとつのフッドウランを構成するには小規模すぎた」[Castles 1972:36]と述べている。このように、ホルジャとフッドウランの包含関係について、まったく相反する見解が提示されているのである。しかし、この点についてはどちらの見解が正しいというレベルで議論するのではなく、多様なヴァリエーションの存在を示していると理解すべきであろう。

そこで、ここでは少なくともタツパハン地区におけるホルジャとフッドウランの関係について、インタビューの結果をもとに明らかにしておきたい。タツパハン地区の政治史に詳しいある老人によると、植民地支配の当初、ピウス・タツパハンを構成していた六つのホルジャのうち、リントン・ニ・フタを含む三つのホルジャから、オランダ政府によって四人のラジャ・イフタンが任命されたという。リントン・ニ・フタは人口規模の大きなホルジャであったため、メンバー数が多く勢力の強い二つのリネージをそれぞれ代表する形で二名のラジャ・イフタンが選出されたのだと彼は語った。このうちの一人の子孫が保存していた任命状によると、リントン・ニ・フタでは1887年に二人のラジャ・イフタンが任命されたことが明らかである⁹⁾。

ラジャ・イフタンの地位をめぐる、ひとつのフッドウランにまとめられたリネージの代表者たちの間で争いが生じ、ラジャ・イフタンの候補者として互いに競合する人々が行政官のも

とに殺到したので、フッドウランの下位区分の首長として、ラジャ・イフタンに従属するラジャ・パドゥア (raja padua) という新しい役職が置かれることもあった [Keuning 1958:17]。詳細な事情は不明だが、リントン・ニ・フタでも、二人いたラジャ・イフタンのうちの一方を補佐する形で、一人のラジャ・パドゥアが置かれた。このラジャ・パドゥアの任命状は確認できなかったが、村人たちの語るるところから判断すると、先に述べた二人のラジャ・イフタンとほぼ同じ時期に任命されたと考えてよいようである。

リントン・ニ・フタの村人たちによると、植民地支配の初期においては、政庁との窓口になったラジャ・イフタンは、政庁の権威を背景に強力な政治的権力を手にしたという。改葬慣行に基づく石棺建立には、村人を動員して大きな石を牽引させるための社会的・政治的威信と多大な財力が必要とされたが、トバ・ホルブンでは、ラジャ・イフタンに関連した石棺が多いと考えられること [池上 1995:70- 4] から、その点は裏付けられるであろう。

しかし、フッドウランでも行政単位としては小規模すぎ、各地のラジャ・イフタンやラジャ・パドゥアとの接触が煩雑さを極めると判断したオランダ政庁は、1917年にいくつかのフッドウランをまとめて、約170のヌグリ (negeri) を設定した [Keuning 1958:17]。ケーニングのこの記述に従えば、フッドウランの上位単位であるヌグリの数はフッドウランの数より少ないことになる。これに対して、キャッスルズは、1915年頃にフッドウランの編成が中止された際には141のフッドウランがあったが、1938年時点では144のヌグリと残存していた17のフッドウランがあったことを論拠に、フッドウランとヌグリはほぼ同数であったと述べ、ケーニングの見解の誤りを指摘している [Castles 1972:208]。

ここでも、タッパハン地区におけるフッドウランとヌグリの関係について述べるに止めたい。上述のように、かつてのピウスに相当するタッパハン地区では、当初四つのフッドウランが設定された。先に挙げた政治史に詳しい老人やリントン・ニ・フタの村人たちによると、オランダ政庁はあるラジャ・イフタンの死後は後任者を任命せず、残っているラジャ・イフタンに隣接するフッドウランも併せて統治させるという形式で、ラジャ・イフタンの縮小を図ったという。ここでは、ピウス・タッパハンにほぼ相当する地理的範囲がヌグリ・タッパハンに統合された。かつてのピウス・タッパハンに含まれていたタラブンガは、同じマルガの多い隣りのヌグリに含まれることを希望し、ヌグリ・タッパハンには加わらなかった⁹⁾。ヌグリ・タッパハンでは、1937年にクバラ・ヌグリの選挙が行われた [Bruner 1959:59]。

しかし、ヌグリの編成と同時に、さらに上位の行政単位も設置されたため、政治単位としてのヌグリの重要性は損なわれることになった。当時の事情を、ケーニングの記述に基づいてまとめると以下ようになる。いくつかのヌグリをその構成単位とするディストリクト (district) とその下位区分であるサブ・ディストリクト (sub-district) が設置され、それぞれの長としてバタック人の政庁官吏がデマン (demang) とアシスタント・デマン (assistant-demang) という役職に任命された。人々は政庁への依頼事項をアシスタント・デマンに持ち込むようになり、オランダ人の監督官も、クバラ・ヌグリではなく、アシスタント・デマンに対して末端行政に関するあらゆる種類の質問をするようになった。クバラ・ヌグリは、ヨーロッパ人やバタック人の政庁官吏から要請されたことはいかなることでも行わなければならないが、イニシアティブを発揮することは全く期待されていなかった。司法面においては、クバラ・ヌグリはクバラ・カンブンと共に、最も扱い易い訴訟だけを処理した。さらに、クバラ・ヌグリはアシスタント・デマンやヨーロッパ人監督官が議長を務める法廷の構成員となった。そして、

クバラ・カンブンと共に、徴税や労役管理に携わった[Keuning 1958:18]。政庁業務の増加に伴い、ヨーロッパ行政官と植民地首長たちとの間にバタック人の政庁官吏が導入されたことによって、クバラ・ヌグリを含めた首長たちは実質的な権限を失い、住人は植民地首長ではなくバタック人の政庁官吏に敬意を払うようになったのである[Vergouwen 1964:129- 30]。

(B) オランダ時代のフタの変化

以上の議論を踏まえて、オランダ植民地支配前後のトバ・バタック社会における政治構造を対比させて模式的に示すと図3のようになる。オランダ政庁支配の浸透により、政治・司法機能はラジャ・フタから切り離され、ラジャ・フタの権威は失墜した。政庁の統治下で末端行政単位としての位置づけを与えられなかったフタは、政治的単位としての重要性を喪失したのである。「ラジャ・フタはフタの道徳的均衡状態(moral equilibrium)の維持者でなくなった」[Viner 1979:102]というヴァイナーの表現は、この点を如実に言い表している。

また、政庁やミッションの指導でフタ間のいくさがなくなったため、いくさの指導者としてのラジャ・フタの重要性が消失した。防衛上の必要がなくなり、

周りに土塁を築かないフタも作られるようになったことが、この点を象徴している。

ミッションの指導で一夫多妻が禁止されたことも、有力なラジャ・フタが勢力を拡大する上でマイナス要因となったと考えられる。かつて、有力なラジャ・フタは多くの妻をめぐり、縁組み関係による連帯を多角化することで支持勢力を拡大したが、それが不可能となったのである。リントン・ニ・フタに当初二人おかれたラジャ・イフタンのうちの一人は、五人の妻を持ち、息子は十二人いたが、キリスト教が浸透すると複数の妻を持つ者は著しく減少した。

さらに、1920年代から北スマトラ東海岸部への移住者が増加した点も、ラジャ・フタの勢力の弱体化に影響があったものと思われる。移住者の増加は、第一にラジャ・フタを支持するフタのメンバーの減少を招来したであろう。また、リントン・ニ・フタの村人たちも語るように、移住先で政庁官吏や農園事務官、教師兼牧師補助あるいは商人として富を築き、経済的にはラジャ・フタを凌ぐ者も出現してきた。経済的優位性を保持できなくなった時、ラジャ・フタの権威が色褪せるのは否めない流れだったと考えられるのである。

独立後の末端行政機構

1942年から1945年までの日本軍政期とそれに続く1949年までの独立戦争の混乱期を経た後¹⁰⁾、インドネシア共和国政府の末端行政機構がトバ・バタック社会においても浸透した。タッパハン地区の各行政村においては、1950年から1953年の間に新しい村長を選出するための選挙が行われ、1942年時点で八人のクバラ・カンブンがいたリントン・ニ・フタでも、一人の新

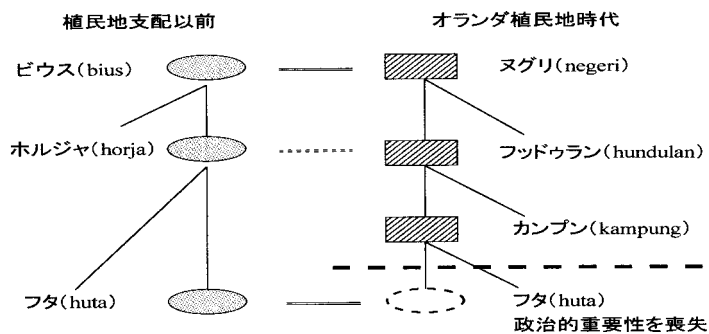


図3 植民地支配前後での政治機構の比較

しいクバラ・カンブンが選出された[Bruner 1959:60]。すなわち、リントン・ニ・フタでは、ホルジャの単位がインドネシア共和国の政治機構における末端行政単位となったのである。タツパハン地区をはじめ、トバ・ホルブンにおいては、このようにホルジャが行政村の単位と一致する傾向が一般に認められる。

1979年の村落行政法改定以後は、農村部の行政村は「デサ (desa)」という名称に統一され、行政村の村長はクバラ・デサ (kepala desa) と称されるようになった。今日のリントン・ニ・フタでは、村人たちの直接選挙によってクバラ・デサが選出される。一方、ホルジャ全体に係わるアダット関連事項については、ホルジャの成員権を持つ成人男子の合議が行われる。

このように、今日の政府行政機構下においても、フタは行政機構の末端として位置づけられていない。オランダ植民地支配の時代から進化したフタの自律性崩壊に伴い、ラジャ・フタの権威失墜は決定的なものとなった。あるフタの創設者を参照点とした父系出自に基づく系譜は自他共に認識されているが、特定の人物がラジャ・フタとして認知され、その権威を背景にフタの出来事を律する場面は今日ではほとんどないと言ってよい。調査期間中に直接見聞した事例では、あるフタの出身者以外の者がそのフタに家の新築を希望した際、そのフタに居住しているかつてのラジャ・フタの父系子孫に対して事前の申し入れが必要とされたという程度である。儀礼における供犠獣の肉の分配においても、かつてラジャ・フタに献呈されていた部位は、クバラ・デサなど政府行政機関の役職者に与えられる。

むすび

トバ・バタック社会における政治的リーダーとしてのラジャは専制的な王ではなかった。フタの自律性が高かった植民地支配以前の時代においては、フタ創設者の父系子孫であるという系譜上の条件と個人的資質の卓越性という条件を満たしたラジャ・フタが、小規模な集落における政治的リーダーとして機能していた。より上位の単位における政治的意志決定に際しても、ラジャ・フタの合議が原則とされていた。しかし、フタが植民地統治下での末端行政単位とならず、ラジャ・フタの特権がラジャ・イフタンやクバラ・カンブンなどの植民地首長に侵食され、さらに人々の表敬の対象がバタック人行政官へと推移してゆく中で、ラジャ・フタの権威は形骸化し、今日に至っている。

「私たちはラジャの子孫だから、このような立派な陶器の皿を持っているのだ」という冒頭で紹介した一文は、リントン・ニ・フタのラジャ・イフタンの子孫が語った言葉である。この例が示すように、今日「ラジャの子孫である」との表現で祖先の社会的・政治的地位について言及するのは、ラジャ・フタの子孫ではなく、ラジャ・イフタンなど植民地首長の子孫である場合が多い。すなわち、政治的リーダーとしての用法においては、ラジャという言葉で指し示されるものが、ラジャ・フタから植民地首長へとシフトする傾向が認められるのである。

この点に注意を払わず、トバ・バタック人が口にする「ラジャ」という語句を単純にチーフないし首長と翻訳して理解するだけでは、彼らがどのような時代のいかなる単位における政治的リーダーを意図しているのか、誤解する危険性がある。すでに指摘したように、ビレッジないし村という語句についても同様である。トバ・バタック社会における政治構造や政治的リーダーシップについて議論する際には、書き手の意図するものと読み手の理解に齟齬が生じることを避けるため、村や首長といった一見了解しやすい語句をどのような単位に対して用いるのか、自覚的に提示することが重要であろう。

本稿は限られた資料と限定された地区の事例に依拠しており、現時点での研究ノートとしての性格を有する。今後オランダ語文献やドイツ語文献など、今回検討できなかった資料を読み進んだ上で、考察を深化させる必要がある。

註

- 1) 島嶼部東南アジアにおいては、15世紀初頭に港市国家として興ったマラッカ王国のイスラム改宗の際に、その王がアラビア語で統治者を意味するスルタン (sultan) を名乗って以来、イスラム王国の王がスルタンと称されることがあった[アンダヤ 1986b:152]。また、ジャワにおいては、王はラトウ (ratu) と称された[土屋 1986:84- 5]。
- 2) 現代のインドネシア語においては、ラジャという語はこれとは別の意味で用いられることがある。たとえば、インドネシアにおいてよく普及しているインドネシア語 - 英語辞典においては、ラジャの意味は、王、(実業界や政界の)大立者、あることに秀でた者、と説明され、の例として raja minyak (油) = oil baron (石油王) の例として raja makan (食べる) = heavy eater (大食漢), gourmet (美食家) などが挙げられている[Echols and Shadily 1990:445]。
- 3) トバ・バタック社会における墓の調査結果については、池上[1995]および Ikegami[1997]を参照のこと。
- 4) 第三の意味でのラジャは男性に対してのみ用いられる。女性に対しては、妻ないし女性を意味するソリパダ (soripada) という語句の前に、英語の“ladies”に相当するイナッタ (inangta) を付加し、「イナッタ・ソリパダ」という表現が用いられる。
- 5) 調査は1991年6月から1994年9月にかけて、断続的に計5回、延べ12ヶ月間にわたって行われた。そのうちの一部は、平成2(1990)年度文部省アジア諸国等派遣留学生制度と平成4(1992)年度および平成5(1993)年度文部省科学研究費補助金(国際学術研究、代表加藤剛京都大学教授)の資金援助を受けた。文部省ならびにインドネシア科学院(LIPI)をはじめとしたインドネシア共和国政府関係諸機関に対して、この場を借りて謝意を表したい。
- 6) フェルハウウェンがトバ・バタック地方に滞在した1920年代後半を意味する。
- 7) 植民地行政の当事者であったフェルハウウェンとケーニングがそれぞれ記しているように、トバ・バタック社会の内部においてさえ、ある時点で一律の統治機構が末端レベルまで一挙に浸透したわけではなかった[Vergouwen 1964:127- 30; Keuning 1958:16- 7]。植民地時代における地方政治構造の変遷は、地域によってさまざまな変異があり、その全貌を体系的に記述することは本稿の範囲を超えている。また、本稿で主として取り上げているタツパハン地区についても、末端行政の単位は紆余曲折を経て変動しているので、本稿では基本的な図式を押さえるに止める。トバ・ホルブンにおけるこの時期の地方政治の詳細については、Castles [1972]を参照。
- 8) リントン・ニ・フタにおけるラジャ・イフタンの歴史については Ikegami [1997]において詳述した。
- 9) タラブンガがヌグリ・タツパハンに加わらなかった詳細な経緯については、Castles [1972: 211- 2]を参照のこと。
- 10) この間の政治機構については、Bruner [1959:59- 60]を参照。

〔付記〕本稿は、日本民族学会第30回研究大会（1996年5月26日、静岡大学）での研究発表「ラジャとは何者か - トバ・バタック社会における“首長”の性格をめぐる一考察 -」に基づくものである。その際、的確なご質問を下された広島大学の小池誠先生（現桃山学院大学）と南山大学の倉田勇先生に対して、この場を借りて御礼申し上げます。

文献

- アンダヤ, L.Y. 1986a. 「スルタン」『東南アジアを知る事典』石井米雄他監修, pp.152- 3. 東京: 平凡社.
- _____. 1986b. 「ラジャ」『東南アジアを知る事典』石井米雄他監修, pp.329- 30. 東京: 平凡社.
- Bruner, E.M. 1959. "The Toba Batak Village." In *Local, Ethnic, and National Loyalties in Village Indonesia: a Symposium*, edited by G. William Skinner, pp.52- 64, New Haven: Yale University, Cultural Report Series, Southeast Asia Studies, distributed in cooperation with the Institute of Pacific Relations, New York.
- Castles, L. 1972. "The Political Life of a Sumatran Residency: Tapanuli 1915- 1940." Unpublished Ph.D. Dissertation, Yale University.
- _____. 1975. "Statelessness and Stateforming Tendencies among the Batak before Colonial Rule." In *Pre-colonial State Systems in Southeast Asia* (Monographs of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society, no.6), edited by Anthony Reid and Lance Castles, pp.67- 76. Kuala Lumpur: The Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society.
- Departemen Pendidikan dan Kebudayaan. 1989. *Kamus Besar Bahasa Indonesia*. Jakarta: Balai Pustaka.
- Echols, J.M. and H. Shadily. 1990. *Kamus Indonesia- Inggris* (Edisi Ketiga). Jakarta: Penerbit PT Gramedia.
- Gereja HKBP Tampahan. 1938. *Jubileum 1888- 1938 Pesta Sere ni HKBP Tampahan*. Lagoeboti: Zendingdrukkerij Lagoeboti.
- 弘末雅士. 1990. 「バタック族の千年王国運動における預言者の役割—植民地支配者追放の観念の形成—」『史学雑誌』99(1):37- 76.
- Hutauruk, J.R. 1994. "Pengkristenan Tanah Batak Khususnya Wilayah Toba Holbung dan Sekitarnya: 1824/1881- 1911." *Vocatio Dei (Jurnal Pemikiran Theologis)* XXXVIII:97- 123.
- 池上重弘. 1995. 「高い盛土、堅い石 - トバ・バタック族における改葬墓の歴史的变化をめくって -」『南方文化』22:62- 89.
- Ikegami, S. 1997. "Historical Changes of Toba Batak Reburial Tombs: A Case Study of a Rural Community in the Central Highland of North Sumatra."『東南アジア研究』34(4) (印刷中)
- Keuning, J. 1958. *The Toba Batak, Formerly and Now*. Ithaca: Modern Indonesia Project, Southeast Asia Program, Cornell University.
- Marbun, M.A. and I.M.T. Hutapea. 1987. *Kamus Budaya Batak Toba*. Jakarta: Balai Pustaka.

- Pedersen, P.B. 1970. *Batak Blood and Protestant Soul: The Development of National Batak Churches in North Sumatra*. Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing Company.
- Sarumpaet, J.P. 1994. *Kamus Batak- Indonesia*. Jakarta: Penerbit Erlangga.
- Siahaan, S.M. 1984. *Peranan dan Kedudukan Raja dalam Struktur Suku dan Masyarakat Batak*. Medan: Pusat Dokumentasi dan Pengkajian Kebudayaan Batak, Universitas HKBP Nommensen.
- Situmorang, S. 1993. *Toba na Sae*. Jakarta: Pustaka Sinar Harapan.
- 土屋健治 1986. 「クラトン」『東南アジアを知る事典』石井米雄他監修, pp.84- 5. 東京：平凡社.
- Vergouwen, J.C. 1964. *The Social Organisation and Customary Law of the Toba- Batak of Northern Sumatra*. Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, Translation Series 7. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Viner, A.C. 1979. “The Changing Batak.” *Journal of the Malay Branch of the Royal Asiatic Society* 52:84- 112.

[1996年10月30日受理]

